

【創 作】

**創作のための小説
おもしろいプロットとは？**

増 田 辰 良

創作

創作のための小説 — おもしろいプロットとは？

増田辰良

— 札幌市にある某大学の芸術創作学部。宮下教授の研究室には、ゼミナール生の山谷優作と佐伯葉がいる。

宮下 シラバスでもアナウンスしたように、このゼミの最終目的は小説を書き上げることです。今日は、わたしが考えている小説の

プロットを紹介します。君たちは、それに続けて自分なりのプロットを創って、夏休み前の最後のこの時間に作品を提出してください。わたしもそれまでに書き上げますから。

山谷 先生。小説のタイトルは？

宮下 それは、まだ付けていません。書く前にタイトルを付けて、その中身をイメージする作家もいれば、書いている途中や完成後にタイトルを付ける作家もいます。

佐伯 字数は？

宮下 短編にしたいので、原稿用紙三十枚から五十枚ってところかな。先生のプロットに自分たちのプロットを加えるのですね。

宮下 そうです。他人が創ったプロットから想像力を働かせて、自分のプロットを創るのですよ。これが文章を創る力となりますからね。アマチュアとプロとの違いは、アマチュアは自分の興味関心のあることしか書けません。プロは編集者から依頼され

た内容で書けなきゃ食っていきけません。君たちは、将来、プロの作家になる希望があるわけですから……。ときどき、何人かの作家たちが一つのテーマで連作している作品を読むでしょ。あれです。そのとっかかりをわたしが話しますから。聞いてなさい。

佐伯 先生。聞いているだけでは……ノートを取りたいのですが。

宮下 ああ、ノートねえ？ 今日聞いて大事なところをメモすればいいですよ。最終的には、自分独自の構成で、かつ文体を創らなきゃいけませんから。

佐伯 はい。分りました。

宮下 途中で、口をはさんでも、質問をしてもいいからね。わたしも十分にまとめきつていないので今、頭の中にある構想、イメージを話しますから。

(頭の後ろで両手を組み天井の一点を見つめて) Mさんという実直な気質の男性が二十数年前に土地を買います。新築して住むためです。その土地は道路に面していない三方がブロック塀で囲われています。問題は、左隣家との境界にあるブロック塀

キーワード: プロット、共同所有、埋蔵金、起承転結「転結」。

です。この塀は隣家との境界線上に建っています。建っているというよりも両家で話し合って、費用を折半して、境界線上に建てた、というのが正しい事実です。両家には庭木がたくさん植わっていて、その落葉がお互いの庭に落ちるのを防ぐために建てたそうです。Mさんは土地を買い手で売り手であった老女から、そう説明を受けます。なお、この老女の亡夫もその義父、息子も銀行の支店長をされた方々です。お金持ちだったんです。これは重要なネタです。

ブロック塀が建てられたのは昭和四十年代です。経済の成長とともに富裕層の間で屋敷を囲うことが流行ったようです。今からするとずい分と昔のことなので、前の住人たちはブロック塀が共同所有であることの契約書などは交わしていません。当時は、こんなケースがたくさんあったようです。権利意識に過敏すぎる今じゃ考えられないことだけどね。

そして、そのままMさんは受け継ぐことにしました。そのとき隣家には、まだ老夫婦が住んでいました。が、二十五年後くらいに二人ともほぼ同じ頃に亡くなったようです。この老夫婦には息子が近所に住んでいます。親が亡くなると、その土地を不動産屋を通じて売ったんですね。もちろん、ブロック塀のことは亡父から聞かされていたようで……。その親が亡くなったわけだから、息子は自分がその土地に関わるものすべてを相続することになります。形の上では共同所有になっているブロック塀も例外ではありません。息子は、他所に住んでいるので、相続した土地は不要で、売るわけですよ。そのとき、共同所有になっているブロック塀がネックになりました。こんな時代に共同所有を継続するような新たな買い手などいないから

(11)

ね。必ず、揉めますよ。人情までが裁判沙汰になる時代ですから。そこで息子は売るときに、Mさんにはなんの相談もなく、不動産屋と相談をして、この際ブロック塀をMさんのみの所有物にして、修理や処分等はMさんのみの責任で行なわせるという契約書を不動産屋に作らせて、新たに土地を買い手とMさんとの間でブロック塀の所有権と処分権を設定させました。悪賢い発想です。ふん。

さつき、ご両親が「ほぼ同じ頃に亡くなったようです」と表現したけど、「ようです」というのは、Mさんを含め近所の住民たちは、亡くなったことを知らされていなかったんだ。Mさんなんかは、亡くなったということをほぼ一年後に向かいの住人から知らされたんです。だから、次年度の初めに回ってくる回覧板で知った住民もいたそうです。そんな息子だから、土地を売るときだって、ブロック塀の件でMさんには一言の相談もありやしない。売った後も近所へのあいさつ回りもしない。

「生前、老両親がお世話になりました」という最後の挨拶だよ。一方、Mさんは若いときから町内会の役員を積極的に引き受けたり、近所付き合いもよく、また物を大切に作る気質の人物だったので、このブロック塀を自分の所有物にすると記された契約書にすんなりサインと押印をした。「した」というよりも「してあげた」と言う方が正しい。でない、きつとこの塀は壊されていただろうから。というのも共同所有になっている物を処分するとき、裁判で争われるケースが多いんです。判決例を見ると、このブロック塀で言えば、不要だと言う当事者側の費用負担で取り壊されるというケースが多いんです。だから、Mさんは必要だと言っても、隣人の息子が不要と言えば、息子が

費用を負担して、壊すことになります。それはMさんが望むことではありません。また、新たに住むであろう方に嫌な思いをさせたくないということと、またさっきも言ったように物を大切にしている優しい心根から自分の所有物にしてしまおうと考えたわけです。これは変な信仰心が入っているんじゃないかと、人間が必要で作った被造物にも生命や魂が宿っているという考えの持ち主だったんだね。作っては壊し、また作り壊す、という文明というか人間優先への社会的風潮を嫌っていたんだ……。

ああ、先生。ちょっといいですか。共同所有物の処分に関する判例は民法で勉強しましたよ。

山 谷

佐 伯

宮 下

そうそう、一年後期だったわ。

そうかい。続けるね。Mさんは自然が大好きで、雑草の中にある小さな虫たちの生命さえ重んじる方だったんだよ。なので、屋敷内に雑草が蔓延はびこっていても虫の居つきそうな草は抜くこともしなかった。ましてや除草剤を撒くなんてことはしない。秋になると、虫たちの奏でる音をオーケストラとして聴いてもいたんだね。そういう気質の方だった。さらに言うと、住宅を新築するときも、前の住人が育てた樹木たちをそのまま生かしてあげてもいい。リンゴの木、五葉松、サクラランボの木、モミジ、ライラック、オンコなど。通常、他人の土地を買って新築するときって、全部抜いて更地にするだろ。でも、それでは樹木たちの生命を奪うことになってしまう。五十年生きてきた樹も三分もあれば、切り倒せます。そんな生きた樹の生命を三分で奪っちゃいけない。Mさんは樹木の葉っぱは空気清浄機となって、人間の肺に新鮮な空気を送ってくれる自然からの魔法のような恵み、と位置づけているんだ。そこら辺にいる安っぽい環境学

者にも見習って欲しいほどの見識を持っているんだよ……。

山 谷

ああ、地球の温暖化を抑止するにはCO₂を出しやいけない、出す量を減らさなきゃダメだ！って、声高に叫んでいる環境経済学の教授が大型のランドクルーザーに乗ってますよね。真っ黒な排気ガスを思いっきり出してえ。

宮 下

隣人となる人を乙とした契約書にサインをして不動産屋の営業マンに持って帰らせた。共同所有というのは、さっきも説明したように、その一方が契約を破棄するときには、揉めて、しばしば裁判沙汰になっている。仲介者がいれば相当、うまく仲を取り持たないと、拗こじれる案件だ。面倒事になることを覚悟していたものがいとも簡単に解決をして、いや解決させてくれて、不動産屋の営業マンは「相手方の乙の署名の付いた書類は、後日、お届けします」と言って、意気揚々と帰った。この不動産屋も、ちょっとだけ知恵があったようだ。先に、Mさんに署名と押印をさせたんだな。それについては、Mさんは何の不満も拘りもなかった。いずれはサインしなきゃならぬから。また、するつもりだったから。

佐 伯

えっ？ 民法では当事者同士が契約書を相互に確認してから署名と押印をすれば、揉めることもない、と習いましたよ。

宮 下

うん。本当はそうすべきだよ。さて、ここからだ。ところが、Mさんがもらうべき契約書、つまり新たに隣人となった人、乙が塀の所有と処分についてはすべてMさんが責任を負うことを認めるという契約書に署名した契約書、これがいつまで経っても届かない。不動産屋が持って来ないんだ。ということはいつまでもたつても塀の所有権と処分権はMさんに移らない。こうし

た権利は宙に浮いたままだ。これでは契約を交わしたことになるっていいない。さつき、佐伯さんが言ったように、契約書は双方の手に届いて、その中身を双方が確認し承認することによって、初めて効力を発揮する。契約当事者の一方が正式な契約書を持って、他方が持っていない、こんなの契約じゃない。そんなことは学生である君たちにも分るだろ？ もちろん、隣人は土地を買うときにブロック塀の件はすべてMさんが責任を負い、Mさんの署名のついた契約書を不動産屋から受け取ってから、土地を買う契約を結んだはず。買ってからの面倒事がきらいさっぱりと無くなったわけだから。……まだ話の途中ではあるが、大事なところなのでえ……山谷君、Mさんが署名をしてからどれくらい時間が過ぎたと思う？ この後、プロットを用意してもらおうから、想像力を働かせなさいよ。

山谷 はい。大切な契約書ですからね。すぐに相手方、乙からも署名をもらっているはずだからあ。十日、いやもう少し遅れて二週間後くらいですかね。

宮下 後で話すけど、二週間ならMさんは我慢できただろうね。まだ、隣は更地の状態だったから。佐伯さん、どう？

佐伯 えーッ？ 契約書でしょ。三日後くらい、と思っただけが、あ、うーくん、と二週間ほど後でもなければあ（宮下が顔を横に振ったので） じゃあ、一カ月後ですかね。

宮下 ブーだね。……一年だよ。フン（と、鼻を鳴らした）。

山谷 マジですか!?

佐伯 えーッ!!

宮下

いいかい？ それでも解決していないんだ。Mさんは待てど、暮らせど、不動産屋の営業マンは持ってこない。隣には新しい

家が建って、年も越して、すでに住人が入居して六カ月が過ぎようとしていた。

山谷 えーッ!!? とんでもない！

佐伯 ウソでしょ！

さすがに、Mさんも堪忍袋の緒が切れた。職場から不動産屋の営業所へ電話をして、好きでもない、本心でもない腹立ちの汚い言葉を一言だけ掛けたそうだ。

「あんた、何十年、その商売をしているんだ。いつになったら契約書を持って来るんだ！ 反古にしてもいいんだな!? 一年間分の授業料を寄せよ！ このボケが!!」

宮下

営業マンは「うーうー」と、唸るばかりだった。Mさんは返答の時間を与えず、受話器を乱暴に下ろした。

山谷

先生。ちょっといいですか？

宮下

はい。これって営業マン失格でしょ。Mさんから電話連絡を受けるなんて。

佐伯

Mさんがすんなり署名をして、自分の物にしたから、隣人も今後の面倒事が無くなるということで、その土地を買ったんじゃないですか？

宮下

そうそう、そういう推測は正しいですよ。誰も、買う前から問題を孕んだ物件に手など出しませんよね。

佐伯

その会社、大丈夫ですかあ？ 営業マンを見れば、その会社の品格が判りますよ。

宮下

そうだね。営業マンは身形みなりからして気を遣うって、言われますよね。

佐伯

それにその営業マン、Mさんに感謝すべきですよ。商売をさせ

てもらったのですから。

宮下 そう、そのとおりだね。それが常識だよ。契約書が届かない間、

Mさんは、多少、後悔もしたようだね。

山谷 えッ？ Mさんが、ですか？ どんな後悔ですか？

宮下 署名をするにもすんなりするんじゃないかなって。つまり、少しゴネてえ、時間をかけて、この営業マンに勉強をさせた方がよかったんじゃないかって。ああ、土地を売った息子にも……。

佐伯 あまりにもすんなりと解決してあげたので……相手が何も学ばなかったと。

宮下 そう、そのとおり。

山谷 Mさんが頭にきて、怒鳴りつけたのも理解できますよ。僕だったら、もっと悪態をつけてやりますけどね。責任者を出せ！って。なんてお粗末な営業マン。聞いていただけで腹が立ちます。

宮下 まだ、話はあるんだ。怒鳴られたから、その営業マンはすぐにMさん宅へ契約書を持って来たようだね。自宅には奥さんが居たけど、インターフォン越しに「主人は、まだ帰っていません。その件は主人に話してください」と、答えたそうだ。すると、営業マンは郵便受けに名刺を入れて帰った。

山谷 奥さんにはちゃんと事情を話して謝ったのですかね？

宮下 そこがまた問題です。謝ったと思うかい？ 思えないだろ。夕方、Mさんは帰宅すると奥さんから「名刺だけを置いて帰りましたよ」と、教えられたんだ。しばらくすると、インターフォンが鳴って、例の営業マンが来た。Mさんは書齋で仕事を始めていた。奥さんが「対応してください」と声を掛けてきたので、Mさんは「放っておけ。追い返せ」と助言した。がしかし、そ

うは言うものの奥さんに任せることもでもないで、Mさんは玄関へ出て、一言、言った。さて、何と言ったと思う。佐伯さん。想像してごらん。

佐伯 えッ？ こんなに遅れて持つて来るとは何だ！って、また怒鳴りつけたのかな。

宮下 いいや。一言「今、忙しいので、一年後に持つて来てください」って静かに言ったんだ。

山谷 (笑)なるほどお。営業マンからすると、そんなときってむしろ怒鳴りつけられた方が楽ですよ。冷静に対応されるほど、心にグツサつときますよ。Mさんは一年待たされたのだから、今度はあなたが一年待つて、持つて来いと。こりゃあ、小説になりますね(笑)。

宮下 だろ〜(笑)。で、ここにも大問題がある。「一年後に持つて来い」と言われて、その営業マンはどうしたと思う。

山谷 どうもこうもないでしょ。平謝りして、契約書を手渡して帰ったんじゃないですか。もう謝るしかないでしょ。土下座までしろ、とは言いませんが、丁寧に自分のミスを説明して謝るのが筋ですよ。それ以外に解決策はありえない。

宮下 佐伯さん、どう？

佐伯 責任を取るには、ただひたすら心から謝るか、お詫びをするしかないでしょ。謝ることによって、Mさんの怒りを、心の負担を和らげるだけでなく、自分の正義も回復できて、ようやく交渉の場に立てるんじゃないですか。だから、何度も何度も頭を下げて、自分の失敗をしっかりと言葉にして、山谷君が言うように平謝りして、手渡したんでしょね。

宮下 ふッふッふッ。君たちはノーマルな人間だよ。正しい社会性を

身につけた人間だ。学生である君たちが理解できていて、給料をもらっている営業マンが理解できていない……。 (怒気を含んだ声で) 呆れたヤツだあ。……でも、これで終われば小説にはならない。わざわざ、わたしが君たちの課題とはしないよ。

山谷 ……と言いますと？

宮下 その営業マンは、謝りもせずに、契約書の入った袋を手を提げてすたすたと帰ったよ。

山谷 もう〜、マジでエ〜！

佐伯 え〜〜〜ッ！

山谷 嘘でしょ??

佐伯 信じられない?? 自分のミスでお客さんを一年間も放っておいたのですよ。謝るしかないでしょ。自分がお客さんの立場だったら、って考えませんか？ 許されないうすよ。

山谷 その営業マン、マジでヤバイすよ。もしかして新入社員ですか？ バイトとか？

佐伯 そんなことないって、新入社員なら、何としてでも謝ってるって。入社そうそうこんなへマはできないし、謝るって！ バイトだって、そんなこと理解してるよー。

宮下 うん。中年だよ。名刺を見る限り、役職には就いていない。年恰好からすると四十歳を過ぎていかな。頭の天辺てんぺんも地肌が見えているし。BMI五十の体型だ。困ったヤツだ。……でえ、

山谷 いいかい？ ここから君たちがプロットを創るんだよ。いいね。う〜ん。いきなりですかあ。先生、登場人物の氏名や年齢は自分たちで設定してもいいですか？

宮下 ああ、いいよ。Mさんが土井さんでも大谷さんでもいい。好きなように設定しなさい。

佐伯 先生。確認させてください。すたすたと帰った後のプロットですよね。じゃあ、前段は？

宮下 前段はわたしが書くから、あら筋は変えないよ。さっきの話の終わったところからプロットを創ってください。いいかい、来週、発表してもらおうからね。

山谷 はい。

佐伯 分かりました。

— 一週間後。

宮下 さて、プロットは書けたかな？ 山谷君、どう？

山谷 はい。まず、登場人物についてですが、Mさんの氏名については先生が付けてください。他の二人については佐伯さんと共通にしてみました。で、アホ丸出しの営業マンは鈴木晃すずきあきら、四十五歳くらい。旧隣家の、これも社会性の欠片もない息子は吉田利行よしだとしゆき、こちらは四十歳くらい、とします。最初に、先生の文章に加筆すべきだと思うのですが、意見を言ってもよろしいでしょうか？

宮下 いいよ、いいよ、何でも言っつて、大いに参考にするから。遠慮はいらないよ。

山谷 不動産屋を通してしかブロック塀の所有権の移動を処理できない吉田のバカさ加減も書くべきです。親が亡くなっても近所の住民に知らせないということですから。また土地を処分したときも前後左右の住人たちに何も挨拶しなかったようですよ。その吉田の亡くなった老親は、きっとMさんや町内会、近所の方々にも色々とお世話になったはずですよ。息子にスズメ

の涙ほどの社会性があれば、通常は家や土地を手放すとき、引越すときにも生前両親がお世話になりました、って挨拶して回りますよね。ねえ、佐伯さん。

佐伯

もちろん。わたしも大学に入学してから二回、アパートとマンションを引っ越したけど、両隣の住人には挨拶をして出ましたよ。

山谷

でしよう。だからあ、吉田に関してはそんな社会性の無さを書くべきです。どうもこの小説の端緒は吉田がMさんにちゃんと相談しなかったことにあるように思います。Mさんの親切心だけが救われる内容になっています。吉田は主人公ではないので、どうでもいいのですがあ、いや隠れた主人公かな？ そもそもどんな仕事をしているのですかね。ヤクザっぽいですよねえ。……だから、小説になるかあ。

宮下

ああ、ありがとう。必ず、加筆するよ。いい指摘だね。

山谷

で、その後のプロットですが……自分であれば、鈴木は一年後にまた契約書を持って来るだろうと考えます。当たり前です。仕事は完結していませんから。問題は、そのときMさんがすんなりと受け取るか、どうか、ですね。受け取ったとしても、もうひと波乱ないと、小説にはなりません。ある作家が書いていましたが、起承転結ではダメでえ、起承転結転結てんてんけつになるよう書かないと、読み手は楽しくないそうです。なのでえ、Mさんは受け取らずに、また持って帰らせる、そのときアホな鈴木がどんな態度を見せるのか、平謝りするのか、ポイントと手渡すのか。どちらを選択するかによって、結が変わってきます。一応、ここまで考えてみました。

宮下

じゃあ、佐伯さん。

佐伯

一年後のことですがあ、わたしも二つのプロットを考えました。一つは山谷君と同じで、持って来る。もう一つはまた忘れてしまっただけで来ない。もちろん、持って来ないと話はふくらんで、おもしろくなります。が、持って来ないほどバカじゃないでしょうから持って来たとして、Mさんの対応をどう書くか、これも二つ考えてみました。一つはすんなり受け取る。もちろん、一言も発しないで、ムツとした怖い形相です。でも、これだと小説は終わってしまいます。そこで、考えました。

Mさんは、わざわざ電話を掛けてミスを知らせてあげたほどの律儀な性格の方です。この性格はわたしに言わせれば、教師が身に付けているものです。先生方が勉強しようとしないう学生に（笑）、お灸をすえる声を掛けるようなもので、きつとMさんは「うちはその契約書はいらない。隣人がもう一通持っているだろうから、うちは不要だ。文面や契約書がなくてもブロック塀はうちの物として代々伝えていく。なので、うちの分の契約書は持って帰って、おたくの会社の金庫にでも後生大事に仕舞っておけ！」と。さらに「ブロック塀でトラブルがあれば、毎回、あなたが来て当事者たちに説明しろ！」と。こんなふうにはMさんには対応させるとおもしろいだろうなあ、と考えました。こうすると、小説はまだ終わらずに、さつき山谷君が言った、転結の最後の二番目の転へと展開します。読み手は、まだ解決しない、どう決着をつけるのだ、というふうな結論を知りたがります。どうでしょうか？ こんな感じですよ。

宮下

二人ともありがとう。佐伯さんの最後の書き方、考え方は大切ですね。小説をどうおもしろく読ませるのか、というのは常に頭において書かなければなりません。ある程度、フィクション

山谷
 を読ませるわけだから。そのためには結論へ向かってワクワクするような感覚を読み手に感じてもらうことです。実は、本を読むこと、読書って楽しい、と思わせるのは、この感覚を味わうことなのです。君たちは十分に理解しているようですね。

現実的な話で申し訳ないですが、鈴木のような人物でも営業職が務まるのですか？ 仕事、任せられないですよ。契約書は一番大切なものです。ミスに対して、こんな事後処理じゃあ、一般的な不動産屋のイメージをめちゃめちゃ汚してますよ。別の仕事をした方が……。

佐伯
 さっき山谷君も言っていたように、吉田だって中年のくせに、正しい社会性を身に付けている人物のように思えません。ちゃんと挨拶ができない男性って、どんな仕事をしているのかね。鈴木と同じで仕事を任せられないですよ。嫌だなあ、仕事にプライドを持っていない男性がいる職場なんてえ。もし、わたしが上司なら、転職を勧めますよ。吉田については、そんなイメージしか湧かないです。

山谷
 プライドかあ。そうだよね。プライドって大事だよな。

宮下
 実際にも、こういう人物たちはいると思いますよ。よくそんな姿勢で仕事をして、給料をもらえるやつって。仕事というのは字のごとく、事に仕えるわけですから、お客さんに対しては受身で懇切丁寧に接するべきですよ。任された仕事に最後まで責任を持たなきゃねえ。ただ土地を右から左に転売して、はい終わり！ じゃあ、責任感も養われない。それから、これは君たちへのアドバイスになると思いますが、
 「賢い人間は、その賢さを自分のためだけじゃなくて、他人のために使いなさい」

山谷
 たとえ、トラブルに遭遇しても、いつも自分の利益を最優先するんじゃないかって、周りの利益にも配慮してあげなさい、ってことです。

佐伯
 山谷 周りですか？
 ……先生は、例えばMさんがすんなりとブロック塀を自分の所有物にして、鈴木や吉田の面倒事を解消してあげて、また新たに隣人となる方との火種を消してあげたことを言いたいのですか。

宮下
 そうです。が人間に対してだけじゃなく、物に対しても。

佐伯
 ……物？
 ブロック塀は両家にとって必要だから費用を折半して建て、書面はなくても共同所有してきたものです。必要だから建った物にも関わらず、邪魔になる、面倒事の火種になるからといって、そう簡単に壊すものじゃありません。ブロック塀だって塀として建られてから、長年、生きてきたのですよ。息を

山谷
 ……物にだって魂が宿ってますから……。
 ああ、先生。今、思いついたんですが、Mさんの対応として、もう一つありますよね。

佐伯
 えっ？ どんな？
 鈴木が持って来ても、玄関に出ないで、インターフォン越しに、

山谷
 「あなたの顔は見たくないので、郵送してくださいって」
 (うんうん、と頷きながら)でも、それじゃ、終わってしまっ

小説にならないよ(笑)。

山谷
ああ。そっかあ。

佐伯
でも、現実的にはありかも……。わたしなら、そうします。もう、顔なんて見たくないですよ。……ああ、その際、なぜこうなったのか、八百字以内で始末書を書かせるのもいいかもしれないませんよ(笑)。

山谷
なるほどお。そりゃあ、おもしろい。復習と反省をしていただこうと……。 (思案気に) なぜかこの小説って、ノンフィクションっぽいですよ。

宮下
(顎に右手を当てたまま) ……。

佐伯
わたしも同じ感想を持ちましたけど？

宮下
(キラリと目を光らせて) 活字にすれば気持ちが悪まるということもありますから。ふっふっふっ。

— 一年後。

鈴木は、契約書を持って来た。営業所の責任者を伴って来たのかと思いきや、一人で来た。その上、アポなしで。

「約束通り、一年経ちましたので、契約書を持って参りました」
たったそれだけを口にした。

(こりゃあ、こいつはだめだ!) Mさんは灸をすえる意図を持って、「うちはその契約書はいらない。隣人がもう一通持っているだろうから、うちは不要だ。文面や契約書がなくてもブロック塀はうちの物として代々伝えていく。なので、うちの分の契約書は持って帰って、おたくの会社の金庫にでも後生大事に仕舞っておきなさい」と、佐伯さんの考えた言葉を穏やかな声で投げつけてみた。

鈴木は鳩が豆鉄砲を喰ったような顔をして聞いていた。

Mさんは親切にもその顔へ、

「あんた、隣を見てごらん。もう家が建って何年になる。あんた、その土地、いつ売ったんだ。三日もあれば済む仕事に二年も時間をかけていることを所長や会社の上司に伝えたのかい? あんたよりも若い社員たちにも、このミスを説明して聞かせたかい? 組織全体で問題意識を共有したかい? なぜ、こんなミスを犯してしまったのかって。あんた今、自分がどんな状況にいるのか、置かれているのか、解ってる??」

と付け加え、

「欲しけりゃあ、その契約書をあんたにやるよ」

と汚い言葉を投げつけてから、ドアにバターンと音を出させて閉めた。これも教育的配慮から出た言葉であった。

どう対応していいのか、Mさんはドアの内側で息を殺して待った。一言謝罪の言葉があれば、すんなり受け取るつもりだった。ところが、鈴木は二度とインターフォンを押すことなく、ましてや謝することもなく、また契約書を手に提げてすたすたと帰った。

「呆れたヤツだ! 根っからのボケだ!」

Mさんはそう吐き捨てた。
それから十日ほど後の朝、新聞を捲っていると、ある記事が目飛び込んできた。

『昭和の埋蔵金、続々と出る!』

本州の地方の街で、日本庭園に置かれた狸の置物の腹部や仏像、庭石の底部、石灯笼の台座から小さなジュラルミンケースに入った昭和四十年代の万札が、百枚、二百枚出てきたという内容であった。壊れたブロック塀の中間部分や土台を掘り起こすと、そこからも数百枚の

万札が出てきたケースもあった。あの時代は、高度経済成長期で豊かさの象徴として、富裕層の間では造園やブロック塀を建てるのが富の象徴として流行った。この流行はミニスカートのそれと同じように全国にも広まったそうだ。記事によると、これまでに十数カ所の地域で掘り起こされたブロック塀の土台から万札や金品が出てきたようだ。まさに埋蔵金である。

その三日後、ヘラヘラと口元を緩めた鈴木がMさん家のインターフオンを鳴らした。帰宅したばかりのMさんは、背後から声を掛けられた。

「もう、あなたには用はない。帰ってくれ」

すると、鈴木はA4版の茶封筒をかざしニタニタ笑いながら、

「この契約書は反古にしましょう。そして、あのブロック塀をわたしの物にしてもよろしいでしょうか。いただきたいと思いますよ」

と、顔を塀に向けて黄ばんだ歯を見せて言った。

Mさんは鈴木を凝視して、「あなた、何考えているの？」と返したが、心中、ボケか！と叫んでいた。さらに、試すよう「ああ、いいですよ。あなたの所有物にすればいい。好きなようにしなさい」と続けてみた。

「じゃあ、どう処分してもいいのですね。後で文句は言わないでくださいよ」

そう言う鈴木の口調は何かを企んでいるふうに聞こえた。Mさんは思わず鈴木を見返した。

その翌日の朝。道路から土建屋の職人らしき数人の声が聞こえてきた。しばらくすると隣の敷地からブロック塀を壊し始めた。

それを二階の書斎から見下ろしていたMさんは一瞬、止めに入ろうと逡巡したが捨ておいた。

「生きている物を壊して。きっと罰が当たるぞ」

と、毒づいたがやはり心中、穏やかではなかった。

(10)

作業は一時間ほどで終わった。ブロック塀の土台だけが残った。それを、重機を使って掘り起こし始めた。

「いったい、何をしたいんだ」

たまたまMさんは階段を早足で下りて、庭に出た。道路では、現場監督ふうの男がタバコを啜くえて、何やら図面を見ていた。

Mさんは、いかにも怪訝そうな声をかけた。

「ブロック。何をしていますか？」

「ああ、大きな音を出してすみません」男はちょこんと頭をさげてから、「わたしもよくは知らないのですが、この土台に金が隠されているそうで……」顔をそちらに向けてから、「掘り起こしてるんですよ」

と、ニンマリと笑った。

「金？ こんな所に？」

「はい。……らしいですよ。いくらの金かは知りませんがね。うちは頼まれて……」

男は、また口元を歪めて笑った。

「誰に？」

「えっとオ、札幌の不動産屋で営業をしている鈴木とかいう方からです」

この立ち話を隣人も家屋内から見えていたようで、若い主人が出てきた。

「いやあ、この土地を買うときに仲介した不動産屋が、壊させてくれてるうるさいものですから。Mさんから所有権を譲ってもらったえ」と確認するようMさんの顔を見てから「何を考えているのやら？」と、困りきった表情をした。それから「急用がありますので」と言って軽自動車を走らせた。

入れ替りに黒色のSUVが勢いよくやってきて、タイヤにブレーキ

音を出させて停まった。

鈴木はこれまでと変わらない貧相な顔付きをして、

「金目の物が出てくれば、儲けものですよ。すべてわたしのものだから。ヘッヘッヘッ。Mさん、あなたが簡単に契約書に署名をした理由が分かりましたよ。独り占めはさせませんよ」

と、ケラケラとバカにしたような笑い声を立てた。

Mさんは「止めなさい」と釘をさしてから、

「出るわけがない。あんたはあ、まったくもって理解していないなあ?」と腹立たしく、はたきつけるように言った。

それにもめげず、鈴木は、

「この記事、読みましたかあ?」

と、手にした新聞を広げた。

Mさんは「ああ、これかあ」と嘆息を洩らし、一瞬、何か異常なことでも口走りそうな形相で鈴木を睨みつけた。

鈴木は、その視線を避けるよう新聞に目を落とし、

「当時、資産家の間でブロック塀を建るのが流行って、その土台に金を隠したそうです。税金逃れ、相続税逃れの手だったそうです。本州では、このころ毎週のように色んな地域で金が掘り出されています。このブロック塀が造られたのも昭和四十年代なんです。お宅の土地の前の所有者は代々銀行の支店長をされてた方ですよ。ご存知でしょ。共同所有になっていけば、誰もが簡単に手を出せないので。うまく隠し所を考えたもんだあ。さすがは金持ちだな。ヘッヘッヘッ」と、顎を土台へしゃくって挑発的な目をして笑った。

(こいつは救いようのないアホだ! ボケだ!) Mさんはそんな感情をはつきりと顔に浮かべて、

「柳の下に、いつも泥鱸はいない!!」

と諭すよう、その頭に五寸釘でも打ち込むように、また強く言い放った。

鈴木は眉をひそめ、キョトンとした視線を虚空に泳がせた。その顔には、何を意味不明なことを言っているんだあ?と書いてあった。

二時間ほどかけてきれいに掘り起こした頃、一人の職人がニタニタ笑いながら、

「こんな物が出てきましたよ」

と手の平を開き、差し出した。

そこには錆び付いた三センチほどの釘が一本あった。

それを受け取ると鈴木は無言で、うな垂れた。

Mさんは、その照かっている鈴木の頭頂部をめがけ、

「ボケは死んでも治らん!!」

と言い捨てて、その場を離れた。

こうして宮下教授は、講義と会議の空き時間を使って、二日でこの短篇小説を書き上げた。

(了)

付記。どんなに独創的な小説と言われようが無から生まれたわけではありません。必ず、砂粒ほどのアイデアを他から得ています。なので、新たに書かれる小説も既にある小説の隠れた部分を表出させただけ、という見方もできます。

この拙稿も例外ではありません。ジェフリー・フォード「ファンタジー作家の助手」(二〇一八)からアイデアを得て、創りました。フォードの作中の作家(アシモリアン)が拙稿では教授、助手(メアリー)が二人の学生たちです。

フォードの作品の中ではファンタジー作家が読書好きな助手を雇います。

そして作家自身が書けなくなったとき（作家の言葉で「見ることができないんだ」三十五頁）、その原稿を持ち帰らせて読ませ、後続の文章を考えてくるよう依頼します。もちろん助手はアルバイト代がもらえるので忠実に、この依頼をこなします。作家は助手が考えた結末に不満で少し修正した、という手紙を送ってきます。というのが大まかな筋ですが、最後にオチが待っています。この作品全体を書き上げたのは（作中の）助手（現役の大学生の設定）であることが明言されています。

文章を創る作業はおもしろい、とつくづく思うことがあります。拙稿の内容はウソなのか、事実なのか。ウソを事実のように、事実をウソのように描くのが小説ではあるが、もし事実として読まれたのであれば、筆者はほくそ笑む。ウソと事実。何が、そう読ませるのか。

それは文体です。文体は曲者です。文体、文体……文末にどんな言葉を置くのか、句読点をどこに打つのか、どこで改行するのか、によって言葉と言葉の響き合い、行と行の間にある空気が変わり、自ずと次に置かれるべき言葉を選ばせませす。その言葉の選ばれ方によって、内容はウソになったり、事実になったり、読み手を楽しい想像の迷宮へと導きます。

読み手を厭きさせないそんなおもしろいプロットとは？ 拙稿の前半は対話形式で、それを考える導入部となっています。

ここでも他人のアイディアに頼りましょう。おもしろいプロットとは、起承転結ではなくてえ、起承転結「転結」だそうです。これは井上ひさし（二〇二〇）が喜劇について語った言葉です。喜劇に限らず、どんな物語もワクワクするような構成やプロットであれば、読んで楽しいはずです。それが、「転結」です。拙稿もそれを意識して描いてみました。さてさて、読み手からはどう評価されることやら。

数年前の夏休み期間中（二月月ほど）に習作の一環として、他人を罵倒する、悪態をつく表現をただひたすら描く訓練をしました。これが結構、大変というか、軽い頭を重たくして言葉をノートに書き込むのですが、ふと我に返るとき、自己嫌悪に苛まれそうになりました。が結局、身に付いたという体感はありません（大きく変わることはなかったようです。大変の意味）。しかし、そのときにもがき苦しんだことが、拙稿の一部にでも反映していれば、それはそれでとても嬉しいことです。

欲を言う「？」や「！」という符号を使わなくても感情の起伏を描ける

だけの筆力を身に付けたいものです。なお、「？」や「！」は欧文での用法にならって明治二十年（一八八七年）頃から使われるようになったそうです。二葉亭四迷「あいゞき」（一八八八年）小学館辞典編集部（二〇一四）を参照してください。

なお、構成については、前半はドラマのシナリオを書く手法を使ってみました。文章表現技法の一つとして、筆者なりに挑戦を試みてみました。

参考文献

- 井上ひさし（二〇二〇）『芝居とその周辺』岩波書店、一二二頁。
 小学館辞典編集部（二〇一四）『句読点記号、符号活用辞典』小学館、三十頁、三十三頁。
 ジェフリー・フォード（谷垣暁美 編訳）『ファンタジー作家の助手』（二〇一八）『言葉人形 ジェフリー・フォード短篇傑作選』東京創元社、二十九〜五十二頁所収。

